

# 人間力の土台になる自尊感情の育みの一考察 —創価教育学をもとにした人間教育の実践から—

宗 像 武 彦

## I はじめに

新学習指導要領が告示され、現場で施行されている。その趣旨と流れは一人一人が主体的に対話的に深い学びをしつつ、新たな社会の価値を創っていく教育であり、本学創立者池田大作（「池田」と書く）の「人間教育」の考えと同じ方向であるとする。その新学習指導要領の趣旨は、「人間教育」を進めることでより充実した実現が図られると考えている。それはどのような教育なのか。

筆者は、本学で学び小学校の教壇に立ち教職の道を歩んできた。本学は、『創価教育学体系』（以下『体系』と述べる）を著した牧口常三郎が創始者である。その『体系』では「教育の目的は、子供の幸福」といわれ、その幸福とは自己と他者の幸福の確立であり、そこから自分の人生を切り拓き、様々な困難を受け止め、そこから新たな価値を創造していくことを「創価教育学」として打ち立てた。それをもとに、「池田」は、本学の三つの指針の中に「人間教育の最高学府たれ」といわれ、人間教育を目指す取り組みの大事さを示されている。

この「人間教育」を「池田」は、教育ではなく「人間教育」の言葉を使われている。本来教育は人間の営みで教育でもいいと考えるが、人間第一に大事にする教育することを根幹にしていくために「池田」は「人間教育」と表現したと考えている。筆者は、現在まで小学校や小中一貫校の現場で34年間教育に携わってきた。本学の卒業生として、一人一人の児童生徒とのかかわりと育みを第一に「人間教育」の実践を心がけてきた。その実践の根幹は、一人一人の児童生徒が自ら立って律していくことが未来に向かって生きていく力になることであり、その力は「自尊感情」であり、その育みのためには「人間教育」の基本となると考え教育の実践をしてきた。

では、その「自尊感情」とは何か。それが教育上どのような役割を持つのか。「自尊感情」は心理学的分野だが、教育上大事な分野ととらえつつ、学校現場での

実践と文献の特徴的なものを取り上げ「自尊感情」とは何かを明らかにしていく。さらに、「人間教育」と「創価教育学」との関係から「人間教育」と「自尊感情」がどうかかわっているのか、具体的な実践から明らかにしていく。

キーワード 創価教育学 人間教育 自尊感情

## Ⅱ 自尊感情とは

### 1 自尊感情の考え方の基本

「自尊感情」についてまず広辞苑で確認したい。自尊感情に関しての直接的な解釈はないが「自尊」については、「自重して自ら品位を保つようにすること。」と書かれている。その中で「自尊感情」に関する研究を進めていくが、『東京都教職員研修センター紀要』（以下「センター紀要」とする）をまず確認し進めていく。「センター紀要」での「自尊感情」については、「本研究では、自尊感情を自分の否定的な面を受容するとともに、前向きに取り組み、様々な影響の中で自分を見失わず、可能性を信じて行動できる幼児・児童・生徒の育成を目指し、『自分をかけがえない存在だと思う気持ち』をとらえた。」<sup>1)</sup>としている。その背景に「センター紀要」では、特に心理学者ローゼンバーグのとらえ方を重視し、自尊感情について、二つの異なる意味について述べ、一つは自分を「とてもよい (verygood)」と考えるもの、もう一つは自分を「これでよい (good enough)」と考えるとしている。前者は完全性や優越性を含む感覚で、他者との比較関係を基に「優劣」を基準に置いた考え方。後者は自分なりに満足を感じる感覚で、自分の中の価値基準をベースとして自分を受容する考え方を挙げて「センター紀要」の考える「自尊感情」は、後者の「ローゼンバーグのいう『good enough』の考え方と、研究の求める方向性は一致している。」<sup>2)</sup>と論述している。

本稿でも、「自尊感情」については、「good enough 他者を認識しつつ、自分の否定的な面を受容しつつ、前向きに取り組み、様々な影響の中で自分を見失わず、可能性を信じて行動できる自分をかけがえない存在だと思う気持ち」を基本的考え方としていくこととしたい。それは、自分自身を否定することなく前に向かって、自分自身が行動できていく力が「自尊感情」と考えるからである。

### 2 自尊感情の研究の批判と状況

#### (1) 自尊感情の研究の批判

「自尊感情」の考え方を述べたが、その考えと違う批判的な部分についてここで述べていく。山崎勝之（鳴門教職大学院教授、兵庫大学連合大学院教授兼任）は、著書

『自尊感情革命』の中で、米国カリフォルニア州が、「セルフ・エスティームと個人的、社会的責任を育成するタスク・フォース」を設ける法案を議会で通し、自尊感情に関する研究を調査する学者のチームが編成、結果が1989年に公表されたことを挙げている。その結果は「自尊感情と期待された結果は大変低いことと、相関関係は低すぎて、低い自尊感情が社会的問題を生み出しているかもしれないというテーゼを出せないほどだった。」<sup>3)</sup>と記述している。また同著書の中で、フロリダ州立大学の心理学者バウマイスター博士らの研究を紹介し、2001年までに出版された自尊感情と他の変数（健康、適応、遂行力など）との関係についての1万5000以上の論文を抽出して調べた結果、「ほとんどの論文は、自尊感情の低さが個人的ならびに社会的問題をもたらすという因果関係の推定に十分な科学的方法をとっていないことが分かった」<sup>4)</sup>と書かれ自尊感情と社会性に関する否定的な記述が書かれている。

## (2) 批判をもとに現状から見た自尊感情の考え方

「山崎」は、同著の中で自尊感情についての批判について「自尊感情自体の問題があるのではなく、私たちが考えてきた自尊感情の概念が間違っていて、その間違いを正せば自尊感情を救えるのではないか？」<sup>5)</sup>と述べ、「新生の自尊感情として新たな研究や教育を打ち立てること」<sup>6)</sup>を示している。

では、その「新生自尊感情」とはなにか？「山崎」は、「自律性」に焦点を当てて、同著の中で「私たちの言う自律性は、内発的早期づけ、自己信頼心、他者信頼心がそろい踏みした複合性格です。他者信頼心とは、他者を好意的に見て、他者からも好意的に見られているという安定した性格です。自己信頼心は、自分に自信があり、有能であると考えられる性格で、同時に不安や攻撃性が低く、他者信頼心を伴う概念です。(中略) この自律性が備わると健康や適応上の多くの問題がクリアされることがわかっています。」<sup>7)</sup>と述べつつ、「この自律性を、自己信頼心や有能感の観点で協調して言い換えたのが『自律的自尊感情』になります。(中略) この自律性自尊感情は自律性の高まりと対応しているので、当然健康や適応には良好な結果をもたらすことになります。」<sup>8)</sup>と述べている。

また、こうした新しい自尊感情の考え方は、アメリカ、ジョージア大学のカーニス博士の考え方があり次のように論述している。「安定した高い自尊感情と脆い高い自尊感情です。(中略) 安定した自尊感情、つまり最適な自尊感情こそ健康や適応を高めると考えました。」<sup>9)</sup> また、デシ博士とライアン博士は、「真の自尊感情は、内発的な動機付けの満足が伴い、比較的安定し、本人にはその高さへの自覚はありません。一方、随伴的自尊感情は、自分が設定する外的な達成基準に照らしてその高低が決まります。(中略) 真の自尊感情こそが良好な結果をもたらす、随伴的自尊感情は負の結果をもたらすと考えられています。」<sup>10)</sup>と新しい自尊感情の概念と類似した概念として「自律的自尊感情」を述べている。

こうした考え方の視点は、「非意識」を中核に置き、非意識とは無意識や前意識であり、「山崎」は「自尊感情と非認識と関係はかなり大切な内容を含んでいます」<sup>11)</sup>と述べつつ、そこに視点を置いて最終的な目標は「自律性」の育成を目指す取り組みが「自尊感情」の育みとしている。この「自律性」と「自尊感情」の育みの考え方から本題を深めていく。

### （3）自律的自尊感情の育みと学校教育での取り組み

「山崎」は、同著で「私たちの言う自律性は、内発的動機づけ、自己信頼心、他者信頼心がそろい踏みした複合性格です。（中略）この自律性を、自己依頼心や有能感の観点を強調して言い換えたのが『自律的自尊感情』になります。』<sup>12)</sup>この『自律的自尊感情』は、生後からの母親のかかわりが大事で、母親の生まれたときからの愛情あふれるかかわりで信頼心が生まれ自己信頼心となり他者信頼心になっていくことと、内発的動機づけも赤ちゃんがやりたいことをさせていくところから育まれると「非意識」の家庭での育みの大事さを述べている。

こうした家庭の育みを土台に、学校教育での取り組みはどうなのか。「山崎」は同著で、「幼い子供もやがて小学校へ入ります。自律的自尊感情の形成はほとんどの子供が中途半端です。（中略）この時期に何とかしなければ、その後に自律的自尊感情の欠如をカバーすることは難しくなります。学校の先生は自律的自尊感情の存在と大切さを知って、（中略）学校での児童への個別のかかわりに母なるものの愛情を注ぎましょう。授業中でも言葉かけ一つ、顔の表情一つで、効果的な自律的自尊感情の育成へと向かわせることができます。』<sup>13)</sup>と書かれ、学校教育での「自律的自尊感情」の育みは、教師が母親の愛情のように、子供たちとの信頼関係を大事に、そのまま受け入れ自己依頼心から「自律的自尊感情」を育んでいくことの大事さと見ることができる。

そのために具体的には、一人一人の子供たちのよさを見つめ、認め褒めて関係を深め信頼関係をつくり自己信頼心を育む。さらに内発的動機づけも、特に授業で一人一人の子どもたちが「やる気」ができるような仕掛けを考え、主体的な学びができるようにする。そして主体的学びから協同的な学びをすすめることで、さらなる内発的動機づけとなり協働性と自己信頼心も育まれていき、学校教育でも「自律的自尊感情」を育んでいくことができると考える。

### （4）学校教育での自律的自尊感情の育みの具体的取り組み

学校での「自律的自尊感情」の育みは、児童生徒の身近である教師のかかわりの中で大事なことがあり見えてきた。その場合、教師が具体的にどのようにかかわり、育んでいくかが鍵となる。「山崎」が述べている「自律的自尊感情」の形成は、「母親の愛情」のような具体的なかかわりを教師がしていくことが大事になる

が、母親と子どもは1対1の関係であり、教師はクラス集団の中での関係で、母親の愛情を教師が子どもたちへかかわりの中で育みことができるかという疑問が残る。東京都教育委員会では、「センター紀要」<sup>14)</sup>で、自尊感情の育みを次のように述べている。

自尊感情を高めるための観点については、学校等における指導・援助で配慮することとして、自尊感情を高めるための5観点について、以下のことを教員が日常の指導の中で、意識して取り組むことが重要であると考えた。

各観点について、2～3項目の配慮事項を設定した。配慮事項については例として示しており、各学級、学校等の幼児・児童・生徒の実態や発達段階に応じて、工夫して指導を行うことが望ましい。

と述べつつ、次の5観点のかかわりと指導を具体的に述べている。<sup>15)</sup>

A 自分への気付き

「その子自身を認める」「自己決定させる」「ルールや目標をもたせる」

B 自分の役割

「役立っていることを実感させる」「できる自分を意識させる」「周りの人からの肯定的な評価を受ける場を設定する」

C 自分の個性と多様な価値観

「自分の考えを大切にさせる」「多様な価値観を理解させる」

D 他者とのかかわりと感謝

「多様なかかわりを経験させる」「周りの人に支えられていることを実感させる」

E 自分の可能性

「できたことを実感させる」「否定的な面に対する気持ちを切り替えさせる」「他者との同様に気付かせる」

この5観点は、自分への気付き・役割・個性・価値観・可能性や他者とのかかわりと感謝の観点であり、具体的には、その子のよさを認めたり、できたこと役立つことを実感できるように、教師が一人一人の児童生徒にかかわることから自尊感情の育みがあるとしている。

こうした、教師自身がより具体的な個に応じたかかわりは、一人一人との強い信頼関係が大事であり、それを土台に日々かかわることは、「山崎」の言う「母親の愛情」のよる具体的かかわりになり「自律的な自尊感情」を育みと同じの方向を向いていると考える。

さらに「自律的な自尊感情」については、「岡山大学大学院教育学研究科研究収録」の「教師の賞賛が小学生の自尊感情と学校適応に及ぼす影響 古市裕一・柴田雄介」の論文では、結論として「今回の調査結果を見る限り、教師からのほめられ経験は、子どもたちの自尊感情、さらに学習意欲や学校生活教授に肯定的な影響を



及ぼすといえよう。ただし、どのようなほめ方をするかによってほめることに影響に違いがあることも事実である。」<sup>16)</sup>と書かれている。

また、『教育と医学』のなかで加藤圭子は『人との関係性から自尊感情を育む』で、「人との関係性における自尊感情は、行動の原動力となる。」<sup>17)</sup>と述べている。

そして、『GRIT やりぬく力』Angela Duckworth 著 神崎明子訳では、才能があっても力を出し切れない人も多く、その中では「やりぬく力」が大事と述べている。そのやりぬく力は「子どものころの『ほめられ方が一生』を左右する」<sup>18)</sup>として、「じつは大人になって成功や失敗をしたとき、その原因を自分の才能に結び付けるか、それとも努力に結びつけるかは子どものころの『ほめられ方』によって決まる確率が高い。アメリカの特別認可学校『KIPP』では、『生まれながらの才能』よりも『努力』と『学習』をほめることを、教員養成の明確な方針として定められている。」<sup>19)</sup>と書かれている。この「ほめること」は、自尊感情の育みと同じ方向を意味すると筆者は捉えている。

教師は、日々一人一人の児童にどのようにかわるか。それは、日々一人一人すべての個に同じように関わることは不可能に近い。だが筆者の教師経験から、一人一人の児童をよりよく育むという教育実践の経験知から見ると、一人一人のよさを見逃さず褒め関わるのが一人一人のより良い育ちになっていくことを実感し、褒めることの実践へと進めることができたのである。そう考えると「自律的自尊感情」の育ちのためのかわりと同じ方向であることが見えてくる。

この状況を踏まえ、「牧口」が『体系』で「教育の目的は児童の幸福」と述べているところに着目し、児童一人一人が幸福になっていくために、教師はどうかかわるのか。『体系』では、どのように書かれているか。「池田」の「人間教育」ではどうなのか。「牧口」の創価教育と「池田」の人間教育、そして「自律的自尊感情」の育みと関連させて次の論述をしていく。

### 3 創価教育と人間教育と自尊感情の関係性

#### (1) 創価教育学体系から

「牧口」は、教師の仕事について『体系』の中では、「教師は自身が尊敬の的たる王座を下って、王座に向かうことを指導する公僕となり、手本を示す主人ではなくて手本に導く伴侶となる。」<sup>20)</sup>と書かれ、教師の立場から児童の側に立ち児童自身が学び幸福をつかんでいくことを根幹にした考えがある。その立場から『体系』での教師のかかわりは、「教師の直面せる仕事に対しての労力の分配は、教育材料に対する児童の感応作用の指導をなす事が其の本質的の働きというべきである。（中略）しかし幼年生には教師が教材に成り変っての代弁並びに感応作用の奨励を最も必要とする。」<sup>21)</sup>として、児童や幼児に「感応作用の奨励」が最も必要と書かれ、教師が幼児や児童の側に立つ「感応と奨励」のかかわりが大事としている。

さらに『体系』では、「被教育者の日常生活の環境そのままを教材として、之を評価し認識せしめ、その真相を知らしめ、価値を獲得させる為の幫助者とし奨励者とし警戒者として、其の任務を完うすべきである」<sup>22)</sup>として、教師は児童のそのままを受け入れ評価し認識して、その児童の課題や良さを「真相」として知りつつ、児童自身が生きるための大事な価値を獲得できるように「幫助者」となり「奨励者」となっていくことが大事と書かれている。

幫助者は支援すること。奨励者はよさを認めて褒めていくことととらえることが「体系」から確認できる。そして、児童自身が「感応」できるように「幫助」「奨励」が書かれている事は、児童の側に立った言葉であり現在にも通じることであることを確認したい。

## (2) 創価教育学から人間教育へ

このような「牧口」の「体系」での「感応」させていく教師や、教師は幫助者や奨励者になることを述べているが、それをもとに「池田」は、『わが教育者へ贈る』の中で、「教育の目的は、機会を作ることではなく、人間形成、つまり人間をつくることにある。人間—なんと偉大な存在であろうか。人間は一切の文化の創造の源である。その生命の内奥には、計り知れない可能性が秘められている。それを引き出し、磨き上げ、完成へと導き、子ども自身の幸福と社会の繁栄を築いていくのが『人間教育』である」<sup>23)</sup>と述べられている。

また、「池田」は『希望の世紀へ』の中で、「教育の根本目的は何か。創価教育の父・牧口先生は、それは『子どもの幸福にある』と断言された。今日の教育の混迷に最大の要因は、この、何のための教育かが見失われているように思える。子どもは、教師が自分の幸福を願っていることを感じてこそ、信頼もし、心を開くのである。また、子どもの幸福を真剣に考えてこそ、初めて子どもの性格も、才能も、問題点も見えてくるといえよう。」<sup>24)</sup>と述べられ、「教育の目的は子どもの幸福」という信念から、教師が子どもを信頼し真剣に願っていくとき、子どもの心を開き信頼し、子ども自身のよさや課題も見えてくるとしている。これは「牧口」が『体系』で、「感応作用」の大事さや「児童をそのまま受け入れ評価認識」していくことの具体的言葉として語られ、人間を大事にしていくまなざしにしていることが分かる。

そして、「池田」は『わが教育者に贈る』の中で、教育実践記録の3000事例を対象にした分析報告をもとに、教師に望まれる子どもへの「五つのかかわり」を述べられている。その5つとは①「信じ抜く」②「ありのまま受け入れる」③「励まし続ける」④「どもまでも支える」⑤「心をつなぐ」<sup>25)</sup>になる。この「池田」の「人間教育」の5つの関りの考え方は、「牧口」の「創価教育」を基に具体化した考えであり、一人一人の子供たちに目を向け子どもの可能性を信じ、受け入れ、励ま

し、支えて心とつないでいく教育である事が見えてくる。

(3) 創価教育学と人間教育から「自律的自尊感情」の育みへ

「牧口」は、『体系』で「教育の目標は子どもの幸福」として、学び方を学んでいく「学習指導主義」に立ち、「自律」していくことで、子どもたち自身が新たな価値を創造していくことができるとしている。それを「池田」は、教師は子ども一人一人の可能性を信じ抜き、ありのまま受け入れ、励まし続け、支えていくことで子どもたち自身が、自分のよさに気づき自ら人生を拓くことができると、創価教育学の「子どもの幸福」を目指す取組みとして「人間教育」を具体的に述べられてきた。それは、その子のよさを信じ抜き、かわり、支え励ます「母親的愛情」からの「自律的自尊感情」の育みにつながると考える。

「池田」は、ジョン・デューイ協会の元会長のバージニア工科大学教授ジム・ガリソン、同元会長の南イリノイ大学教授ラリー・ヒックマン教授との対談集『人間教育への新しき潮流』の中で、自尊感情についてガリソン教授は「自尊感情や自信は、適切な独立心から生まれます。よき教師と同じように、よき親は子どもたちとともに学び、子どもたちについて学ぶことを楽しむものです。ちょうど教師が学校で生徒と関るように、親たちも家庭のなかで子供たちを注視し、各々に適した仕事を生み出しながら、温かな配慮を持って、それぞれの個性や能力の伸ばせるよう手助けをしてあげなければなりません。」<sup>26)</sup>と述べられ、「自律的自尊感情」の育みにかかわることを具体的に書かれている。

このようなことから、「創価教育学」と「人間教育」が、「自律的自尊感情」の育みとつながることが分かる。それらの考えを、簡単な言葉にすると子供たち一人一人の可能性を信じて一人一人の子供たちを、ほめて育てることが大事でありつながっていることが分かる。

以上の論述をもとに、「自尊感情」を育むために、一人一人のよさを褒め認めかわることであり、その「自尊感情」の育みから「自律性」が育っていくと考え、その考えをもとに以下、学校教育での実践の状況を論述して、その根拠の一端としていく。

### Ⅲ 学校教育での「自律的自尊感情」の具体的取り組みと成果

#### 1 筆者のA小学校学校経営での校長の方針と具体的取り組み

学校経営方針の「学級経営の充実」のところで、以下のように方針を示した。

「②支え、励まし、認め合う、心と心が結ばれた学級づくりを推進します。

(ア) 一人一人の子供のよさを見つけ、励ますことに心がけます。

(イ) 教師が子供と遊び、語り、共に汗を流す中で、子供と喜び、悲しみを共



感じ、『いけないことはいけない』と指導したときに素直に受けとめ信頼関係が築かれていくのです。(以下略)』<sup>27)</sup>

として、児童一人一人のよさを見つめ、寄り添い、励まし関わる「自尊感情」の育みが人間力の土台になることを方針で示し実践を進めることとした。

こうした取り組みの中で、2年後の学校経営報告書には、

「本校の児童生徒の実態を見ると、優しさや思いやりという人としての大事な面は着実にはぐくまれ、本校の良さとなって着実に育成されている。反面、まだまだ自尊感情については、調査結果は低くないものの、自律に向かっていく真の自尊感情にはなっていない。さらに学力について様々な取り組みの中、依然として課題がある。

そのために今年度私たちは、教育の原点に立ち、児童一人ひとりの良さをほめて育てることを大事にしながら、未来への可能性を信じぬくかかわりを大切にしてきた。そして地域とつながり保護者と連携し、知・徳・体・共生の育みの土台を大事にして、自律めざし個に応じたかかわりや授業の工夫をして学力向上を図り、児童一人一人が未来を自ら拓き創っていく取り組みをすすめてきた。」<sup>28)</sup>

と記述し、自尊感情の育みと実践は少しずつ成果が見えてきたことが分かる。

## 2 A校での学校経営から見た自尊感情の育みの実際

ここで筆者が2019年度の本学通信教育部の論文で学校経営のデータを引用したが、本稿でも自尊感情の育みの実際について有効なので引用する。その引用データは、保護者が学校をどう見ているか。3年間の学校経営の保護者のアンケートの項目からまず見ていく。

表1 保護者のアンケートから見た学校経営の状況

平成27年度

	評価する	だいたい 評価する	あまり評 価しない	評価 しない	分から ない	肯定的 評価計
子供の学級は落ち着いて学習できる雰囲気である。	40	37	9	3	11	77
学校はいじめに適切に対応し、いじめのない学級づくりに取り組んでいる。	28	31	10	2	29	59
学校は子供の生活指導に熱心に取り組んでいる。	28	43	10	2	18	70
学校は学習環境の整備や清掃活動に取り組んでいる。	36	41	14	1	8	77

平成28年度

	評価する	だいたい 評価する	あまり評 価しない	評価 しない	分から ない	肯定的 評価計
子供の学級は落ち着いて学習できる雰囲気である。	45	35	10	3	7	80
学校はいじめに適切に対応し、いじめのない学級づくりに取り組んでいる。	30	32	10	2	25	63
学校は子供の生活指導に熱心に取り組んでいる。	38	42	8	2	10	80
学校は学習環境の整備や清掃活動に取り組んでいる。	45	40	7	3	5	86

平成29年度

	評価する	だいたい 評価する	あまり評 価しない	評価 しない	分から ない	肯定的 評価計
子供の学級は落ち着いて学習できる雰囲気である。	42	37	10	3	8	79
学校はいじめに適切に対応し、いじめのない学級づくりに取り組んでいる。	28	41	7	2	22	68
学校は子供の生活指導に熱心に取り組んでいる。	35	46	7	2	10	81
学校は学習環境の整備や清掃活動に取り組んでいる。	43	42	7	4	3	85

「学級は落ち着いているか」「いじめの対応はどうか」「生活指導に熱心に取り組んでいるか」「学校環境の整備の取組み」の4項目で見てみた。この4項目から見

えるのは、保護者は、教師が児童一人一人と関り、学びや生活指導などで具体的に進めているかが学校という取組みだが見えてくる。やはり、この3年間の学校経営で児童一人一人のよさを認め褒めてかかわっていかうとしてきた成果が見えてくるといえると考える。

また、「自尊感情」に関しては、心理学上もいろいろ様々に分析したり、質問項目も専門的なところからのアプローチが多く、様々な批判があると思いが、同論文で述べてきたところをここで取り上げ、論を進めていく。同論文では、以下のように述べ記述した。

表2 学校経営での自尊感情の育み状況 ……2019年拙校論文<sup>29)</sup>より

4年生での調査の中で、自尊感情に関する項目で、特に「自分自身を伸ばしたい」という項目に着目し、特に小学校4年生は「10歳の壁」とも言われるぐらい、学習では、具体的な知識中心から概念化をしていく「考える力」が問われていく学年であり、生活面では、思春期の入り口とも言われ不安定さが増していく時期でもある。そうした時期は、自尊感情が低くなりやすく、自分を伸ばしたいという意識も薄くなりがちになるために、この項目に着目した。以下状況をみていく。

平成27年度では、  
「自分の力をできるかぎりのばしたいと思う。」

		とても そう思う	まあまあ そう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない
校内	率	64.2	26.4	6.6	2.8
	人数	68	28	7	3
全市	率	68.6	24.1	5.4	1.8
	人数	3076	1082	243	80

平成28年度では、平成27年度から28年度の変容だが、固定した4年生の状況を見てということで、4学年の状況をみていくと、「とてもそう思う」が約12P 向上し、「まあまあそう思う」が10P 減少、「あまりそう思わない」が0.3P 減少、「全くそう思わない」が1.8P 減少が見られた。着実に、大事な4学年の自尊感情の一部であるが向上が見られていることが分かる。

校内	率	76.0	16.7	6.3	1.0
	人数	73	16	6	1
全市	率	72.0	21.2	4.8	2.0
	人数	3341	983	223	95

平成29年度では調査の内容が変わり「自分自身を伸ばしたい」の項目から、今までの項目と同様な項目として「自分には様々な可能性がある」という項目を見てみた。

校内	率	43.2	31.8	15.9	9.1
	人数	38	28	14	8
全市	率	38.0	36.1	18.7	7.2
	人数	1716	1627	843	324

平成27・28年度と違う調査項目になったが、肯定的な回答は75.0であり市は74.1で若干上回った数値になった。否定的な数値は25.0で市は25.9でこれも若干下回った数値になっている。

という数値となり、校内での取組みで4年生という学年の経年変化を見てきたが、現に児童全体を見ると落ち着いており、教師と保護者のとの連携による褒めて育てるというかかわりの実践は、「自律の自尊感情」という言葉と創価教育学からの人間教育という流れは、方向的に一致していると考えられる。

#### Ⅳ まとめと考察

今回の研究から見てきたことは、「創価教育学」は児童一人一人を人間としての幸福を目指しつつ、一人一人が人生や社会の価値を創造していく教育学であり、それをもとに創立者は「人間教育」という言葉にしたことは、一人一人の児童・生徒・学生に対して、一人一人の可能性を信じかかわり、その児童・生徒・学生自身が、自らの未来や社会を創っていく力になるということから、「創価教育学」をもとに「人間教育」という言葉を使われているのではないかということが見えた。

さらに、児童や生徒、そして学生が未来を自ら拓いていくためのキーワードは「自尊感情」であり、その「自尊感情」は、『創価教育学体系』でも、児童の「感応」を育む教師のかかわりの大事さと、創立者の「人間教育」は、「児童にとって最大の教育環境は教師自身」といわれているが、教師自身が児童・生徒・学生の可能性を信じ抜きかかわり、「自尊感情」を育むことが、未来を拓く力になることが見えた。

また、こうした考えで、学校現場で「褒めて育てる」ということを校内で進めていくことで、「自尊感情」が育まれていくことがデータによってみることもできた。

今後の課題として、心理学的面からのアプローチを進めていくことでより「自尊感情」の大事さが見えてくること。学校現場での実践が1校での実践なので、より

信頼あるエビデンスになるために多くの学校でのデータを集めてまとめていくことなどが課題となると考える。

## 引用文献

- 1) 「自尊感情や自己肯定感に関する研究」『東京都教職員研修センター紀要』第8号
- 2) 同紀要第8号(平成20年10月) P.7
- 3) 『自尊感情革命』山崎勝之著 福村出版株式会社 P.20
- 4) 同 P.22
- 5) 同 P.24
- 6) 同 P.25
- 7) 同 P.49～P.50
- 8) 同 P.50
- 9) 同 P.47
- 10) 同 P.47～P.48
- 11) 同 P.53
- 12) 同 P.49～P.50
- 13) 同 P.132～P.133
- 14) 「自尊感情や自己肯定感に関する研究」『東京都教職員研修センター紀要』第8号
- 15) 同紀要第8号(平成20年10月) P.16
- 16) 「教師の賞賛が小学生の自尊感情と学校適応に及ぼす影響」古市裕一・柴田雄介  
『岡山大学大学院教育学研究科研究収録』第154号(2013) P.29～P.31
- 17) 『教育と医学』2014 No.727 慶応大学出版会 P.36
- 18) 『GRIT やりぬく力』Angela Duckworth 著 神崎明子訳(ダイヤモンド社) P.242
- 19) 同 P.242
- 20) 『創価教育学体系Ⅳ』P.73 牧口常三郎著 聖教新聞社
- 21) 同体系Ⅲ P.65～P.66
- 22) 同体系Ⅲ P.68
- 23) 『わが教育者に贈る』P.104 池田大作著 聖教新聞社
- 24) 『希望の世紀へ』P.102 池田大作著 鳳書院
- 25) 『わが教育者に贈る』P.60 池田大作著 聖教新聞社
- 26) 『人間教育への新しき潮流』P.176 池田大作／ジム・ガリソン／ラリー・ヒックマン  
第三文明社
- 27) 「A 小学校学校経営方針」の「学級経営の充実」平成26年4月
- 28) 「A 小学校学校経営報告書」平成28年3月
- 29) 「学校の組織マネジメントの在り方の一考察—創価教育学をもとにした小・中の9年間を見通した実践から—」『通信教育部論集22号』創価大学 2019年